



中国がわかるシリーズ14 三国志の時代

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明

[東]漢が衰亡し群雄が割拠する混乱の中で、いち早く頭角を現した曹操は、196年、荒れ果てた都の洛陽から、献帝を自らの根拠地である許都(許昌)に迎えて、[東]漢を実質的に傀儡政権としました。当時は、人物鑑定が盛んであり、名人、許劭は、曹操を「治世の能臣、乱世の姦雄」と評したと言われています。因みに、許劭は毎月1日にテーマを決めて人物鑑定を行っていたため、「月旦」という言葉が生まれました。人物鑑定の流行は、やがて世の中から官僚を抜擢する九品官人法に結実することになります。

曹操は、戦乱で人口が激減した中原を立て直すため、屯田制(均田制の祖形)を始めました。田地を公有化して農民に配分する屯田制は、豪族の大土地所有制と両立しない政策です。曹操の優れたリーダーシップが発揮されたことはもちろんですが、戦乱で、豪族支配が後退した時期だからこそ、実現出来たという側面もあるのでしょうか。また、曹操は、屯田制の上に、後に租庸調と呼ばれることになる税体系をも確立しました。これらの施策を見れば、曹操のグランド・デザイナーとしての傑出した能力の高さが窺えます。

曹操は、政治家、軍人として超一流であったばかりではなく、「孫子」を注釈した大学者で、傑出した詩人でもありました(息子の曹丕、曹植も詩才に恵まれており、曹操父子が漢詩隆盛の基を築いたとされています)。長い中国の歴史の中でも、曹操ほどの万能の天才は見当たりません。間違いなく、始皇帝や、唐の太宗、クビライ、康熙帝等と中国史に並び立つ巨星の1人でしょう。

200年、官渡の戦いで、袁紹を破って華北をほぼ統一した曹操は、204年、新都、鄴都を建設し(後の、洛陽、長安、大都など中国の国都のモデルとなりました)、北方で強力に成りつつあった烏丸を従えた後、中国の統一を目指して南下しましたが、208年、赤壁の戦いで、劉備と孫権の連合軍(呉の名参謀、周瑜が指揮しました)に敗退し、これをきっかけにして、劉備の参謀、諸葛亮(孔明)が企図した3国時代が成立することになります(なお、諸葛亮の実兄、諸葛瑾は孫権の宰相、従兄弟の諸葛誕は魏の高官でした。諸葛氏のリスク分散も見事なものがあります)。わが国でも人気の高い、いわゆる三国志の時代が始まったのです。

ただし、わが国で読まれている三国志は、明の初期に成立した通俗小説である「三国志演義」が



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

元になっており、陳寿が執筆した歴史書である三国志(正確には、魏書、呉書、蜀書の3書。魏書の中の東夷伝倭人条は、魏志倭人伝と通称されて有名です)とは全くの別物です。例えば、わが国で広く理解されている三国志の戦いのほとんどは、約1000年も時代を下った明初の戦いをなぞったもので、孔明のモデルが、朱元璋の参謀の劉基であったことは夙に知られています。興味のある方は、「三国志逍遥(山川出版社)」等をご覧ください。

212年、孫権は建業(東晋の建康、後の南京)を建設しました。曹操が、220年に没すると、曹丕が魏を建国しました([東]漢の滅亡)、221年、成都で[東]漢の(遠い)一族だと称して、劉備が[蜀]漢を建国、222年、孫権が江南に呉を建国して、中国は、俗にいう3国鼎立の時代に入りました。3国の軍隊は、鼓吹曲という軍楽に鼓舞されて戦ったと言われています。もちろん、3国の中では、圧倒的に強大な魏が[東]漢を継ぐ正統な政権であり、人口でもその半分に満たない呉や、呉のまた半分にも満たない蜀は、地方政権の域を出ませんでした。

3国鼎立といった言葉や、[蜀]漢が正統であるといったイデオロギーは、後の時代に、朱子学を創始した朱熹が(歴史に)持ち込んだものです。それが、三国志演義として、人口に膾炙したため、例えば、曹操が悪玉で劉備や孔明が善玉であるという歴史の曲解が生じたのです。